
赤魔どうしの旅 -Final Fantasy another story-

飯炉一沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤魔どうしの旅 - Final Fantasy another story -

【Nコード】

N3790W

【作者名】

飯炉一沙

【あらすじ】

赤魔道士……。攻撃、魔法ともに使用できる唯一の職業だが、それがゆえに全てが他の職業に劣ってしまいがちな職業である。

この物語は一人前の赤魔道士を目指す少女と、伝説級の実力を誇る男が出会い、ともに旅をする様子を綴ったものである。

一応ファイナルファンタジーを下地としていますが、元の作品のストーリーや設定等とはあまり関係のないものに仕上げています。あ

らかじめご了承ください。

1話「二人の赤魔道士」

ただっ広い草原で戦闘が繰り広げられていた。

「くらえーっ！」

戦士は勇敢にモンスターに接近し、剣で斬りかかる！

100のダメージ！

「えいっ！」

続いて赤装束に身を包んだ少女が、そのか細い腕で剣を振るい、モンスターを攻撃！

10のダメージ。

ここでモンスターが反撃に移った。

先ほどの少女に襲い掛かる！

「あぶないっ！」

勇敢な戦士はとっさに少女の前に出て、攻撃を受けかばった。

「よくもやったわね」

と今度は黒魔道士の少女が魔法「ファイア」を使った。

それから少し遅れて赤装束の少女も魔法「ファイア」を使った。

100のダメージ！

10のダメージ。

強力な火力でモンスターを焼き尽くし、敵は完全に消滅した。

「大丈夫ですか、戦士さま」

黒魔道士は戦闘がおわるなり、戦士の元へ駆け寄った。
モンスターからの一撃によって負傷している。

「私、回復魔法使えます！ ちょっと待っててください」

「あんたの魔力じゃあ、いつまで待たされるか分かったもんじゃな
いわ。私がやるわ」

白魔道士の少女がそのように言い、魔法「ケアル」を使う。

癒しの光によって、戦士の傷がみるみる塞がり、完全に回復した。

「助かったよ。ありがとう」

と戦士。

「いいんですよ。戦士さまのためならなんでもしますわ」
と白魔道士。

「それにしても、赤魔道士が中途半端すぎて邪魔じゃありませんか、
戦士さま」

と黒魔道士。

「なんでもできるのが赤魔道士の役割ではあるけど……」

「物理攻撃、攻撃魔法、回復魔法。赤魔道士はどれをとっても使い
物になりませんわ。パーティの再編成をするべきです、戦士さま」

白魔道士は戦士の腕に抱きついて、笑みを浮かべながらそんなこ
とを喋った。

「そうよ、戦士さま。こんな中途半端なのとパーティ組んでたら命
がいくつあっても足りないですわ」

黒魔道士も白に負けず劣らずの悪態をつく。

それからさんざん白と黒の魔道士はあーだこーだと喋り……

「そういうことなんだ。だから本当に申し訳ないけど……」

「いいんです。仕方の無いことですから」

という言葉最後に赤魔道士の少女はそのパーティを後にした。

「さあ、新たな街へ参りましょう。きつと素敵な思い出になりますわ」

「戦士さま。私にできることでしたらなんでも言ってくださいね」

などと喋りながらその3人は少女と別の方向へと旅立っていった。

「あんなパーティこっちから願ひ下げよ」

……とは言ったものの、行くあてがない。

また別のパーティに入れてもらえばいいと思ったが、やめた。

これまでも、こうやってパーティを何回もコロコロと変えてきた。だから、分かっていた。また新しいパーティでも同じようなことになるに決まっている。

しかし、今回のパーティのメンツは酷過ぎた。いやあ、あれはひどい、酷過ぎる。なんといってもあいつらの媚び様……。見ていて嫌気がさしていた。

そしてその間にいた戦士は、別段喜びを感じている様子でもないようだったが嫌がっている感じでもなかった。

「要は、全員サイテー野郎だったってことよ」

と誰もいない草原で一人、勝手に結論づけた。

バッサバッサ。

不意に後方から何かが降り立つ気配を感じて少女は振り返る。

見るとそこには、見るからに強そうなドラゴンがいた。

かなり大きく背丈は少女の2倍以上ある。

「ムリムリムリ。絶対無理ーっ!!」

こんな巨体、一人で倒せるワケない。もしかしたらさっきのパーティのメンバーがいたとしてもダメかもしれない。

ドラゴンの目がギョロギョロと動き、少女を発見するとピタッとまとった。

……これは非常にマズイ。

「おい。お前の相手はこの俺だぜ」

お気楽な調子でドラゴンに挑発したのはもちろん、彼女ではない。ドラゴンがその声のした方へ向く。そこには一人の赤魔道士の男がいた。彼もまた全身赤色の服を着ており、羽根付きの帽子をかぶっている。

ドラゴンは火を吐く体勢になる。彼は少しも動じることなく魔法を詠唱し始める。そして、ドラゴンが火を吐くのと同時に、彼も魔法を放つ！

火と火が激しくぶつかり合い、やがて消滅した。ドラゴンの火力もそうとうなものだが、それに対抗しうる魔法を使える彼は只者ではない。そうとうな実力者だ。先ほどの黒魔道士の比ではない。

ドラゴンは火が通用しないことを理解すると、今度は大きな尻尾を振り回してきた。叩きつけられたらどうなるか分かったものではない。

しかし今度も彼は逃げようとしないう。尻尾が目の前に来た瞬間、光速の速さで剣を引き抜き、斬撃を加える。巨大な尻尾がドラゴンの本体から切り離される。勢いあまったドラゴンは転倒し、激しい地響きが起こる。

相当なダメージを負ったドラゴンは敗北を悟り、余力を振り絞って翼を広げどこかへ飛び去っていった。

「……すごい」

目の前で繰り広げられた次元の違う戦闘を目前にして、少女はただ立ち尽くすのみだった。

「すごいだろ」

カチャと小さく音を立てて、剣をしまう。

「オマエ、パーティから見放されただろ？」

「見てたの……？」

まさかさっきの出来事を他人に見られていたとは……。かなりシヨックだ……。

「中途半端な赤魔道士ほどタチの悪いジョブもないしナア。まあしょうがないよね」

「か、勘違いしないでよね！ 私はあのパーティに嫌気がさしてやめただけなんだから！」

「実は俺も赤魔道士なんだ。今なら特別に俺が君をパーティに歓迎してやつてもいいぞ。ヒマだしね」

「……さつきから私の話無視してない？」

「無視してないよ。ちゃんと聞いてるよ」

男はあくびをしながら答える。

「聞いてたんなら何かそれに対して答えなさいよ。会話にならないじゃない！」

「なるさ。それと君の質問の内容だけど、まず1つめの質問。『見たの……？』の回答は当然イエス。じゃなきゃ君がパーティから見放されてたことを俺が知るワケないでしょ。それくらい察してくれなきゃ。2つめの方は……」

「ファイア！」

「ひょい」

「チツ……」

「甘いよ」

魔法を唱えたがあっさりかわされてしまった。この男、なにからなにまでムカツク。こんなムカツキ野郎にさっきの場面を見られたと思うと癪だ。しかもこんなテキスト そうなのにムチャクチャ強い。うう……世の中って理不尽だ。

「街まで一緒に行くか？ 今一人なんだろう？」

「いいわよ、アンタと一緒にだとイライラしそうだから」

「そっかー。じゃあまたなー」

と言つて、後ろ手に手を振つてあっさりと歩いていつてしまった。しつこいよりはいいけどあっさりしすぎなんじゃないかと思う。

「さて、私も明るいうちに町に着かないと……」

ガサゴソガサゴソ……。

いやな音がした。背後から聞こえてきた。振りかえる……。

「ギャオース！」

「グルルルルル！」

「うほほーい！」

大量のモンスターがそこにはいた！

「いやあああああああ！」

赤魔導士の少女は全力で草原を駆け出した。

2話「赤魔道士の道程」

「はあ、はあ、はあ……」

なんとか暮れまでには街にたどり着いたものの、走りまわったせいでものすごい疲労感がある。赤魔道士つてもっとエレガントじゃないといけないのに……。

攻撃、魔法どちらも兼ね備えている魔道士。それだけではなく、カツコイイ赤の衣服を身にまとい、見た目もどのジョブよりも華やかさがある。

しかし、今はその衣服にも走ったときに飛び散った泥が付着しており、カツコよさなど微塵もない。

「まだまだ理想の赤魔道士になれる日がくるのは先みたいね。トホホ……」

とりあえず今日の宿探しを始めることにしよう。もうクタクタで早く休みたい……。

あまり苦勞を要せず宿はすぐに見つかった。値段もそれほど高くなく内装もシンプルだが綺麗なところで、旅人が多く利用しているようだった。

「えっ、満室なんですか？」

「ゴメンナサイネー。今この街で行われる祭りの影響でこここの利用者が多くてねえ……」

どうしよう。その話が本当なら多分他の宿に行ってもおそらく泊まれるのは難しいだろう。困った。

「おっ、やっぱり君もこの町に来たんだ？」

ラフな格好でふらふらと歩いて来た男が話しかけてきた。コイツの顔はよく覚えている。草原で会ったあのムカツキ野郎だ。もう二度と会いたくないと思っていたのに。

「なによ、なんか用なの？」

つつけんどんな態度で言った。

「宿が確保できなくて困っているという感じだね」

「はいはい、そうですね。それでなにか用なの？」

早くここからいなくなれー。と思ったが、相変わらずマイペースなこの男は話しを続けた。

「実はことはもう一つ俺が泊まることになっている宿があるんだが、よかつたらそっちを使ってもらってもいいかなと思ってね」

「なんでアンタにそんな親切なことされなきゃいけないわけ！？」

アンタと私は赤の他人。そんなことされる覚えはないわよ。それじゃ私は宿を探さないといけないからこれで……」

「おいおい、一人でなんとかしようって心がけは素晴らしいけど、たまには人の好意を素直に受け取ることも大事なんだぜ？」

「そうですね。でも、アンタの好意だけは受け取りたくないの。それじゃ」

男がやれやれといった感じで大げさに手を振って見せたが、少女が振り返りもせず外に出て行った。

町は祭りの影響で賑わいを見せていた。

通りには多くの人々が行きかい、たくさんの露天が立ち並んでいる。

中でも多くの人の注目を浴びているのは、ビーストマスターなるジョブの人たちが捕獲してきたモンスターの展示だ。人々はその捕獲してきたモンスター達を柵越しに眺めることができ、それはそれは迫力満載の光景が目の前で見る事ができた。

「あーあ、今日の宿どうしよう……」

あれから街の宿を何箇所か回ってみたが、結果は全部ダメ。

まあこの人の多さなら仕方ないようにも思えるが……。

最後に聞いたあいつの言葉が思い浮かんだ。

「素直にねえ……」

確かにあの時素直になっていればこんな苦勞をすることもなかっ

たわけだが、……でも、あいつに素直になるのはなんかイヤだ。ムカツクし。

「ねえ、コレかわいくない!？」

「なにこれカワイイ! ドラゴンの子供かな？」

なにやらモンスターを見ている人が騒がしいので、少女も見てみるとそこにはドラゴンがいた。それも昼間見たのよりもとてとても小さく、丸っこい目が愛らしく可愛げのある風貌だった。

「あれ……」

ふと気になって注目してみる。このドラゴン、昼間のドラゴンによく似ている。もしかして……。

「グウオオオオオオオオオッ!！」

天空からけたたましい咆哮とともに舞い降りてきたのは、巨大な一匹のドラゴン。痛々しくも尻尾が切断されており、もしかしくても昼間のドラゴンに違いなかった。おそらく子供が連れ去られたことに怒って探していたのだ。

ドラゴンは怒りに満ちていた。大勢いた人々はそのドラゴンを見るなり恐れをなして我先にと早々と逃げ出す。ドラゴンはよくもやってくれたなと言わんばかりに、怒りの炎を口から吐き出し、周囲の建物を焼き払う。

「あなたの子供はまだ大丈夫よ! だから大人しくして! ——つて言ってどうにかなるわけないよね……」

赤魔道士の少女は逃げもせずにもその場に残っていた。他にも少し戦えそうな者が残っていたが、そのドラゴンの気迫に押され一定の距離を保ったまま、なかなか前に踏み出せずにいた。

「だ、誰かあのドラゴンを止められる奴はいないのかっ!」

鎧ががちり装備を固めた戦士風貌の男が言った。

「魔法では奴の炎を防ぐことができませんからどうにも……」

黒魔道士の男が言った。

そっこうしている内に、ドラゴンがこちらに向けて炎を吐いてくる。

「うわー！」

「逃げるー。無理だー！」

と言つて、一目散に逃げ出した。いないよりはマシ程度の奴等だったが、一人取り残された少女はたちまち不安な気持ちになる。が、
「ホントろくな奴いないわね」

いつもの減らず口を言葉にしたらいくらか和らいだ。

実際のところさっきの炎の威力はさほどでもなかった。おそらく警告の意味でやってきたものだろう。撃退するとなるとこれ以上の炎を吐いてくる。そうなるとしてもじゃないが勝ち目はない。

「でも、ここで逃げたら街が消滅する……」

私は赤魔道士。人が安心して暮らせる安全な場所を守るために戦うのが役目だ。そういう存在になるために頑張っている。だから逃げたくない。……けど、

「やつぱ、無理いゝゝゝっ！！」

「理想と現実つてあるでしょ。時には状況を判断して逃げることも大事なんだぜ？ 逃げるが勝ちつて言葉あるでしょ」

最近の中では一番ムカツク男の背中が目の前に現れ、そして――。

気がつけば私はベッドの上にいた。眠っていたらしい。

「あれ……？ ドラゴンは？」

「ドラゴンはもう飛んでったよ。子供を連れてね」

「ああ、よかった……。つて、ええ！？！」

その部屋にいたのはあのムカツク男。

「勘違いしないでね、もう一つの宿があるつて言っただでしょ。ここに君は一人で泊まったわけ。俺はあの時の宿に泊まりました。OK？」

「なーにがOKよ！ 一つもよくないわよ。ああ、アンタに借りを作るなんて……最悪だわ」

「ハハハ、仕方ないさ。あいつは並大抵の人には太刀打ちできないだろうからね」

じゃああなたは並大抵じゃないのか、と問うことは必要なかった。すでに一度その实力を見ている。相当な實力だ。一体何者なんだろう。

それにこの部屋はかなりいい部屋のようだった。調度品も高価そうだし、部屋も広い。なによりベッドがフカフカだ。

「あんたは何者なの？」

「じゃあ、俺はこれで失礼するよ。これで君と会うことももうないのかな？ それじゃ」

相変わらず人の話を聞かない奴……。

マイペースな彼は自由気ままに部屋を出て行った。

確かにあいつはムカツクし人の話はロクに聞かない奴だが、相当な實力がある。……しかも、私と同じ赤魔導士だ。

——今ならまだ間に合うだろうか。

気がつけばさっさと身支度を済ませて、部屋を出発していた。一目散に走り出す。

あいつに今度会ったら言ってやろう。たまには人の話を聞いて受け答えることも大事なんだぜ、と。

3話「未熟な赤魔道士」

「突然だが問題だ。戦士、黒魔道士、白魔道士の3人でパーティを組んだとする。このパーティと同等の力を発揮するには赤魔道士は何人必要だと思う？」

「えーっと……。やっぱり3人必要なのかしら。それぞれが役割分担して……」

「はずれだな」

「なんでよ」

「まず答えは一人。間違いを指摘するとしたら、役割分担するならそもそも赤魔道士は本来の力を発揮できない。一人二役でも三役でもやるのが赤魔道士なのさ」

「それじゃあ、赤魔道士は孤独ってことになるじゃない」

「そうだ」

「そんなのイヤよ。私はその状況に合わせて、物理攻撃に回ったり、魔法を使ったりして、みんなの役に立ちたいのに！」

「そんなことを言ってるからいつまでも中途半端なんだよ」

「なによ、悪いの？」

「他のジョブが一つの事を極めるとするなら、赤魔道士は全部を極めなくちゃならない。つまり俺みたいなエリートにしか務まらないジョブってことなのさ。わーっはっはっは」

「……………」

どうも、私です。いつか立派な赤魔道士になるために、今はこのムカツク男と旅をしています。相変わらずこの男はマイペースだし、いつもやる気はないし、ホントにこんなやつについてきて正解だったのだろうか……。と思う今日この頃。ですが、それでも毎日頑張っています！

今はおつきな街道を歩いています。この先の港町は他の大陸に向かう大型の船がたくさん停泊していて、私達もこれから新大陸へ向けて出発するところなのです。

「新大陸ねえ……。何回行ったかも忘れたよ」

「他人の回想にまで口出すなあ！」

この街道は非常に人通りも多いので、モンスターが出ることは滅多にないという。私達もお気楽モードで歩いているわけだが、この男と話をしようものなら、疲れてしょうがない。……というか、ムカツク。

しかも、こんな奴がものすごく強い赤魔道士で、その上二度も危ないところを助けられているのだから、なおさら腹が立つ。とはいえ一応感謝はしているわけだけど……。

「ギャオーース！」

唐突に一匹のモンスターが出現。

「ちよつと、モンスターは出ないんじゃないの!？」

「出る時は出るさ」

「少しは自分の発言に責任持ちなさいよね」

「はいはい」

と言つて先へ歩き始める。

「つて、ええ!? モンスターはどうすんの!？」

「……別に凶暴性もないし、倒すこともないだろ。奴は走る速度も遅いから、走つて逃げ切れればいいだけのことさ」

「そんなものかしら」

「いいから走るぞ」

「はいはい、分かったわよ……」

「その必要はない！」

走りかけたその瞬間一人の少年がふつと現れた。

少年は赤の衣服を身にまとい、おそらく私達と同じ赤魔道士のようだった。彼は剣を引き抜きモンスターに斬りかかる。……

ダメージが蓄積し、モンスターは消滅した。

「もう危険はありません。大丈夫でしたかお嬢さん」

「お、お嬢さん？ ……誰が？」

「……もともと危険でもなんでもなかったがな」

「もちろん、貴方の事です。お嬢さん」

「その呼び方やめてもらえない？ なんか違和感あってイヤだわ」

「失礼しました。……おや、見たところもしや貴方も赤魔道士では？」

「まあそうだけど……」

「……服装見れば一発で分かるでしょ」

男はつまらなさそうにあくびをしながら言った。

「よかったあ。ボクも赤魔道士なんです。よかったらパーティ組みませんか？ 今探してたところなんです。他のジョブだと気が合わなかったりするじゃないですか。だから赤魔道士のあなたと組めたらきつとうまくいくと思うんです。さあ、どうですか？」

「すみませんが、既にパーティ組んでるんですが……」

「そうですか。ボクは幸せ者だ。こんなに可愛らしい女性とパーティを組めるなんて！ さあ、行きましよう。地平線の彼方まで！」

「だ・か・ら！ パーティ組んでるんですけど」

「……っえ！ なんですって！？ ……貴方の隣に立っている男がそうですか」

少年はチツと舌打ちした。

「フフフ、その男。ボクをパーティに加える。ボクは赤魔道士の中でもかなり強い部類に入る人材だ。剣の腕はそんじょその人には負けない自信がある。それに加えて補助的に魔法を使い、戦闘を有利な状況に持ち込む魔法戦士なんだ、ボクは。仲間に加えて損はないと思うぞ？」

「断る。それじゃ」

「……おい、さっきの話ちゃんと聞いてたのか？ ボクは相当強いんだぞ。そのボクがパーティに入ってあげると言ってるんだ」

「理由その一、お前は赤魔道士として未熟だからだ。そしてその二、お前なんぞより俺の方が数倍つよい。いや、数千倍かな？」

「うつわー。大人げな……」

「そういうわけなんだ。じゃあな」

「おい、待てよ。ならば実力で勝負しろ。どちらがよりそのお嬢さんをお守りするのにふさわしいか！」

「いいだろう」

「よし。負けたら俺をパーティに加えるよ。しかもボクがリーダーで、お前はボクのしもべとなって何でも言うことを聞くんだ」

「いいだろう」

「えっ、そんな約束しちゃっていいの？」

「まあ、わざわざ勝負が見えてる勝負をしてもつまらないし、……
そうだな。こういうのはどうだ？」

4話「赤魔道士の決意」

私と少年は森の中を歩いていた。大分後ろの方にアイツがいて付いてきていた。

アレ、港町は？　と思つた人もいるだろう。

実はアイツの妙な提案で街道のはずれにあるこの森を歩く羽目になった。出てくるモンスターは割と弱いからいいものの、なんでもんなことをしなくちゃならないのよ……。

「ボクとしてはあの男の妙な自信を打ち砕くほど完膚なきまでに叩きのめしたい気持ちでしたが、これもまあアリですね」

赤魔道士の少年が私にふつと体を近づけてくるので、

「キモイ。やめて」

と一蹴した。

「失礼、二人で一緒に歩いているのがうれしくてつい……。しかし、モンスターが現れてもご安心ください。このボクが身を挺して貴方をお守りいたします」

「それはどうも。じゃあとつと先に行きましょう」

……と言つても、先に進んで行ってしまうのは問題アリなのだが。この勝負の内容。あのときアイツが言つた提案とは、

「昔俺がこの森の奥に突き刺した、錆びた剣を探してみる。そしたらお前の勝ちだ」

というものだった。私もこの少年もよく分からないが、とりあえず探しにこの森に入った。

だが、ここら一帯のモンスターはさほど強いわけでもないし、葉と葉の隙間から程よく太陽の光も入ってくるし、迷いそうな要素もない。

となると、その件の剣が恐ろしく難しいところにあるのではないか。……いや、むしろその存在すら怪しい。というかそんな剣があ

るとしたら、あの男は昔ここに來たことがあるということになるが、修行場としては不足のようにも思える。やはりここには一度も着たことはなくて、そんな剣も無いのではなからうか。

「おい、いつになつたらその剣は見つかるんだ？　もう結構歩いたと思うんだけど。まさか無いってことはないよな」

少年が後ろを振り向きアイツを問いたです。彼も同じ事を思ったらしい。無理もない。その剣を探し出すことが勝利条件なのだし。

「黙ってこのまま真っ直ぐ歩いてみる。もう間もなく到着するはずだ」

「その言葉本当だな」

「ああ」

負けるつもりかしら？

そもそも普通に勝負すればあの男はおそらく負けることはないだろう。それをわざわざこんな勝負内容を持ち出して、一体あいつは何を考えているのだろう……。

どんな顔してるのかと私は確認しようと、あいつがいた方を向いてみた。

「あれ……いない？」

迷った……。ワケないよね。もしかして何らかのトラブルに……？

隣にいた少年が言って、耳に意識を集中した。なるほど確かに妙な気配がする。

「ウゲオオオオオオオオオオ！」

まるでこの森を支配しているかのごとくその声は森一帯に轟いた。やがて私達の前に現れたのはオークタイプのモンスター。

醜い顔に丸々とした巨大な胴体。そこから伸びる太い幹のような足と腕。手には朱に染まりし重量のある大きな斧を所持し、充血した赤い目でこちらを凝視している。

「おっと、ちょうどあの方はタイミングよくいないようですね。ならばこのボクが相手をしてさしあげましょう」

剣を引き抜き対峙した。ならば私も――

「あなたは後方に回ってボクの援護を頼みます。こいつは先程までのモンスターとはレベルが違います」

どうやら彼の言うとおりのようだった。果敢にも少年はオークの懷まで接近し白兵戦を仕掛けるが、向こうも巧みに斧を操り、攻撃を捌いている。

私は言われたとおり、補助魔法で援護するが状況はあまりよろしくない。

「このオーク……強い」

そしてとうとう――、

「うわっ！」

罅迫り合いに負け態勢を崩されると、蹴りをくらって吹っ飛び後ろにあった木に叩きつけられた。

「に、逃げろっ！ こいつは相当強い。お前一人で逃げろ」

「でも……あなたが」

「いいから早く！」

その図体とは裏腹にオークの行動は機敏だった。

奴の目が私を捉えると一気に距離を詰められ、軽々しく斧を振り上げ、一撃を放つ。寸でのところでそれを回避すると、今度は奴の腕が伸びてきて首を掴まれる。かなりの握力で引き剥がせそうになり。く、苦しい……。

「そこまでだ」

強く言い放つその男はまさしくアイツだった。彼の剣の一撃により、胴と腕が切断される。首を絞めていた力がなくなり私は解放された。オークは敗北を悟り、身を翻し撤退した……。

「大丈夫か？」

「うん……なんとか」

呼吸を落ち着かせ意識を回復させる。なかなか苦しかったがなんともなくてよかった……。

あいつはその後木にもたれかかって座ったままの少年の方に向か

い、

「女一人も守れないようじゃ、一流の赤魔道士は語れないな。せいぜい貴様は三流だ。出直してこい」

と言いつつ。

「ちよつと……そんなこと言ったら——」

「いいんです。ボクが貴方をお守りできなかったというのは事実です。そして彼が貴方を守ったというのも事実。ええ、完璧にボクの敗北です。認めましょう……」

少年は潔く事実を受け入れそう言った。

「剣の実力はなかなかった。しかし貴様ならもつと伸びるはずだ。

……いくぞ」

「いくぞ。……って彼はどうするの？」

「……今はそつとしておいてやれ」

「ねえ、どこいくの？」

「おお、あつたか」

目の前には真つ直ぐ地面に突き刺さった剣があつた。ちょうどその剣のところに光が差し込み幻想的な雰囲気を出していた。……これが伝説の剣とかならもつとよかったのだけど。

「俺がまだガキの頃、あのオークを倒した時の剣だ。あの日から俺は赤魔道士を目指そうと決意したんだ」

「へえ」

子供の頃からあのオークを倒せたということは、やはりこの男はそうとうトンデモナイ奴なのかもしれない。

「……」

男は剣をじつと見つめ感慨深げに何かを考えているようだった。

「何かいろいろとワケアリなのね」

「……そんなところだ」

こいつが珍しく悲しげな目をしていたのでこれ以上の追求はやめておいた。

「にしてもまだあったとはな。もう一度見ることができてよかった」
「まだあったか。じゃないわよ。なかったらどうするつもりだったのよ」

「その心配はない。彼にはあそこでリタイアしてもらう予定だった」
「は？」

「いやあ、大変だったんだぞ。あのオークは最近じゃ数もめつきり減ってしまったからな。探して誘導してくるのに手間どったぜ」

「なんですって!？」

「なんということだ。すべてはこいつの陰謀だったのだ。こいつのせいで私は……」。

「お前赤魔道士だろ？ だったら自分は守ってもらう存在だなんて思わないことだな。あくまで俺たち赤魔道士は守る側であって——」
「いっぺん死んで脳みそ作り変えろっ!」

後日談。そのとき怒った私の顔はオークにも負けず劣らずの形相だったという……。

5話「赤魔道士の徒勞」

これから向かう町は大きな川を中心に発展した水の町として有名なだ。

川の澄んだ透明で綺麗な水で作られた作物、それから作られる料理の数々は絶品だという。

「ということで俺は瞬間移動して先に行ってるから。そんじゃ」

「ちよつと！ 私はどうなるのよ」

「あと2時間くらいの距離だから。ファイト！！」

と言って、自らに瞬間移動テレポの魔法をかけて自分だけさっさと行ってしまった。私レベルの赤魔道士ではその魔法は使いたくても使うことができない……。

「なにが2時間くらいの距離よ。そうとう長いじゃない。……もう」

あーあ、今頃奴は早速ご馳走にありついていることだろう。

「考えたらお腹減ってきた……。行こう……」

すっかりテンションが下がってしまったが、一步一步確実に町に近づいていった。

——夜。二人は宿にいた。

「な・ん・で！ 私まで仕事させられなくちゃなんないのよ！」

「君が財布を盗られるのがいけないんだろ」

「そもそも、先に一人で食べてたあんたがどうして財布も持っていないのよ」

「最近仕事をするのをすっかり忘れてたから、財布にわずかな金銭しか入っていなかった」

「もういいわ……」

事情はこうだ。

この男は瞬間移動を済ませた直後、店に入りいいだけ美味しい物をたらふく食べた。そして苦勞して私が町に到着した頃には、彼は

会計を済ませようとしているところだった。ところがさっきの説明どおり、お金が足りなかったのだ。しょうがないので代わりに払おうとした私だったが、なんと財布が盗まれていることに気づき、支払うことができなかったのだ……。

「町によやく着いたっていうのに、どうして働かなくちゃいけないワケ!? 私の馳走は? デザートは?」

仕事が終わる頃には、すでにこの店も閉まっており、私はまだこの町の食べ物を口にしていなかった。

「はあ。楽しみにしたのに……」

「しかし盗みなんて感心しないな。こんなに綺麗な町なのに人の心はひどく汚れているらしい」

「そんなことはどうでもいいの! 私の楽しみにしてたご馳走は!? 私は今猛烈にハラペコなのっ!」

「残念だけどうなったら作るしかないな。赤魔道士たるもの料理の腕を極めることも重要だ」

「テキトーに喋ってない?」

「既に食材は買ってきてある。宿の厨房を借りて使うといい。俺が交渉してこよう」

「聞いてないし……」

部屋を出るなりしばらくすると彼は戻ってきて、

「使っていいそうだ」

「と言って……ベッドに向かい、寝た。……寝た!??」

「ねえ、ちよつと起きなさいよ。起きてってば……。——オイコラ、

起きろ! なんで私が作るようになってるのよ。せめてあんたが私に作りなさいよ!」

さんざんの怒号もむなしく彼は既に深い眠りについていた。

「なんていう速さ……。こいつに言わせれば『赤魔道士は寝る速さも極めなくてはならない』ってところかしら……」

ところで私は一番肝なことに気づく。

「私口々に料理したことないじゃん……」

赤魔道士を目指して日々剣を振るっていた私は、料理などほぼや
ったことがないに等しい。

でも今は腹ペコなのでせめておいしく食べられるものを作りたい
のだが……。

「やっぱりコイツを起こしたほうがいいのかしら。なんでも知って
そうだし……」

「その必要はない！」

ボタン！

と勢いよく扉が開くと、そこには以前会ったことのある赤魔道士
の少年がいた。

「お困りのようですね。お嬢さん」

「それはまあ置いといて。あんたここ他人の部屋よ。分かってる？」

「何を言ってるんですか。おなじ赤魔道士同士じゃありませんか。」

それに僕と貴方は以前からも友好関係にあったはずだ」

「一度会っただけじゃないの……」

「いえ、そんなことはどうでもいいんです。しかし許せないのは――
――」

少年はベッドですっかり熟睡している男に対してピシリと指をさ
し、

「なぜ貴方がこのような男と同室なんですか！！ ハッ、まさか既
に貴方はこの男とそういうカンケーにあるのでは……」

少年がへなへなと体を崩し、四つんばいになって本気で残念そう
にしている。

「馬鹿ね。そんなワケないでしょーが。ほんとあんたの勘違いっ
ぷりは見事なものだわ」

にしても確かに言われてみればそうだ。今まで金がかかるからと
いう理由で二人で同じ部屋で泊まったりしてきたが、傍から見れば
それは恋人同士とかそういう関係に見られてもおかしくない。

しかし、アイツと一緒にだと特に深く考えることはなかった気がす
る。そういう対象として一度も見たことがなかった。多分こいつは

父とか兄とかそういう感じの存在なんだと思う。一流の赤魔道士として私と行動を共にしてくれている兄貴分なのだ。

どのみちこんなムカツキ男には尊敬どころか憧れもしないし、大切な人にはなり得ないだろう。まあ、赤魔道士としての実力だけは認めてあげてもいいけど。

「で、あんたは何しに来たの？　言うこと終わったんなら帰りなさいよ」

「もちろんこんなことを言いに来たんじゃありませんよ。貴方がピンチと聞いて馳せ参じました」

「ピンチ？」

「今から料理をするおつもりなのでしょう？　私は少しばかり料理に明るいのできつと貴方のお力になれることと思います」

「別にいらないわよ。あんたはあんたで自分のことでもやってなさいよ」

「僕の料理の腕前なら……」

「いらなかったらいらないの。さっさと帰りなさいよ」

「ガーン！」

上から頭にタライが直撃したかのごとく少年は衝撃を受け、回れ右をしてトボトボと帰っていった。

「さーで、料理するわー！」

6話「Let's クッキング！」

とりあえず材料を宿の厨房へ移し、料理の準備は万端だ。

肉、魚、野菜、米、その他調味料など、一人で食事するには多すぎるほどの食材があった。

「いろいろありすぎて何を作ればいいか分かんないわ……」

これだけの食材があるのだし、どんどん食べたいものを作ることしよう。

「うーん……。お腹がペコペコだし、今日は肉料理で決定ね！」
早速肉を持ってきた。

焼きました。

コゲました。

「あれ、おつかしいなー。焼くだけだから私にもできると思ったんだけど……」

早く焼こうと思って、ファイアを使って火力アップしたのがいけなかったのかもしれない。

よし、肉は後回しにして、真っ白いご飯を用意しよう。

「ご飯を炊くくらい私だってできるわよ」

一人分の米を取り分け、

「まずは洗わなくちゃいけないのよね」

水で米を洗うと、みるみるうちに白い濁り水になっていく。なるほどこれを落とせばいいのか。

何度かこの工程を繰り返すが、洗ってもなかなか無くならない……。

「ええい、ウォーター！」

水の魔法ウォーターを発動させると、勢いよく水が噴出して米を研

磨した。

そして、無残にも米は床のあちこちに飛び散ってしまっていた。

「……………」

少し料理に対する取り組み方が雑なのかもしれない……。

料理って面倒くさい。なんでお腹ペコペコの状態で料理してるのに、こんなに時間がかからなくちゃいけないのだろう。料理している間の空腹感といったらそれはもう異常なほどしんどい。もっと簡単な調理方法はないのだろうか。例えばお湯を入れて3分くらい待つだけで完成する食べ物とか。そんな食べ物があるとしたら、それはきつと私向けの食べ物に違いないだろう。

「あーあ、私って料理向いてないんだろぅなー」

ぐうぐうというお腹の音が私に食べ物を作れと催促するが無視する。すっかり料理する気をなくしてしまった。

「もう降参かい？」

眠そうに話しかけてきたのはアイツだった。もともとコイツの引き起こした出来事によって苦労させられているというのに、のんきなやつ。

「なんか料理が完成したら、おすそ分けしてもらおうかなー」思ってたんだけど……。この様子だとまだできてないみたいだね」

「おすそ分け？ 冗談じゃないわよ。なんであんなにあげる分をつくらなくちゃならないのよ。こっちはご飯も食べられずに料理する羽目になってるっていうのに……」

「おやおや……。料理は愛情なんだぜ？ お腹をすかせた俺に恵んであげる真心こそ料理の真髄なのだよ」

「あんなこそ昼間の出来事に少しでも私に悪いと思っているのなら、せめて手伝うくらいしなさいよ」

「そうだな。確かに悪かった。料理は俺が作ろう。それで許してくれ」

「おっ、珍しく素直じゃない」

「料理人は誠実でないと務まらないからな」

「あんたは赤魔道士でしょうが」

「俺は一流の赤魔道士であると同時に、一流の料理人でもある。俺の辞書に“天は二物を与えず”という言葉はないのだ。ワーツハッハッハ！」

「……………」

彼はその言葉に偽りなく、手馴れた手つきで料理を始める。たちまちいい匂いがしてきて食欲をそそる。料理のレパートリーも相当なもので、次々と彼は料理を作っていく。

「お待ち」

ポンと置かれたのは、熱々のステーキ。香りだけで美味しいということが分かるほどに、見るからに美味しそうだ。

「冷めないうちにどんどん食べちゃいな。まだまだ作るからさー」

「そんなに作っても食べきれないでしょうが、馬鹿」

と思っていたら、匂いにつられて人がやってくる。アイツはそれに気づくと声をかけ、

「よかったら食べていきませんか」

というと、喜んでやってくる。そんな感じでアイツはどんどん人を招き、気がつけばたちまち宿の人が全員集合しているんじゃないかというくらいに人がいた。彼は休まずに次から次に料理を作り続け、人だかりが消えて厨房の中が静まる頃には、すっかり夜も更けこんでいた。

アイツと二人で大量の食器等を洗って片付け、部屋に帰ろうと思つて声をかけてみるが返答がない。

と思つたら、隅で壁にもたれかかつて座つて寝ているのが見えた。相当疲れたのかもしれない。料理をしている間アイツはとても楽しそうだった。料理が得意だからとか好きだからとかそういうことじゃない。……もつと根本的なものだ。

「料理は愛情——か」

料理をするのは確かに面倒くさい。だけど愛情を持って料理を作ったとき、それを食べてくれる誰かがいて一言“美味しい”と言っ

てもらえるだけで頑張れるものなのかもしれない。

「おつかれさま」

彼の寝顔はとても楽しそうだった。

—— 次の日。

「なんだこれは？」

「見て分らないの。パンにハムエッグ。朝食といったらこれで決まりでしょ」

朝、また厨房を少しだけ借りて作ってきた。これくらいの料理なら私にだって作れる。

「そうじゃない。誰が作ったんだ？」

「わ、私だけど。……なんか文句あるの？」

「いや、ないけど」

「じゃあはやく食べてみて」

「ああ」

男がパクっと一口かじりつく。

「……どう？」

「……ふつつ」

「えっ？」

「ふつつ」

「何？」

「だからふつつだって。だいたいハムエッグでそうそう味に変わりがああるわけないし。それに見た目にしても卵がなんかいびつな形してたし。まあ食えるモンなだけよかったけど」

「少しはありがたうと思えーっ!!」

7話「赤魔道士と盗賊団」

水の町滞在二日目。

私たちは宿を出ると、冒険者の集まるギルドへと向かった。

ギルドではいろんなジョブの冒険者がいて、互いに情報交換を行う場として使ったり、冒険者向けにあてられた依頼をこなすこともできる。依頼といってもさまざまで町の周辺に出没した凶悪モンスターの駆除であったり、市民からの私的な依頼もあったりする。今日私たちがここを訪れた理由は依頼をこなして資金を得ることもあったが、

「これだ」

壁に貼り付けられた依頼の紙を見てアイツが言った。

——依頼内容。頻繁に町に出没しては財布を盗む泥棒を捕まえて欲しい。

というわけだ。

「報酬金も悪くない。となると、相手は割と腕の立つ相手かもな」

「そんな奴捕まえられるのかしら」

「余裕だ。なぜなら俺は一流の赤魔道士であると同時に——」

「はいはい分かったから。それじゃあやれるだけやってみましょうか」

「人の話を寸断するのはよくないぞ」

「探すって言ってもどこを探せばいいんだか……」

探す前にギルド内の冒険者に話を聞いてみたが、大した収穫はなかった。

それと、悪い噂を一つ聞いた。最近この町で幅を利かせている盗賊団がいるらしく、どうもその連中はあくどい手段を用いて金銭を

奪うなどかなりの悪事を働かせているそうだと。もしこの依頼がその連中と関わっているとするとするなら、大人しくやめてしまったほうがいいかもしれない、けど……、

「そいつらのせいで困っている人がいるとするなら放ってはおけないわね」

私の財布ももしかしたらそいつらに盗まれたという可能性もある。食べ物の恨みも込めて絶対にギャフンといわせてやりたい。

「なあなあ、あっちにうまそうなケーキがあるぞ！ 食いに行こうぜっ」

「ちよつと！ 探し始めてまだ全然時間たっていないでしょうが！ あんたに集中力はないワケ！？」

「あるさ。ケーキに全神経を集中させて味わう力だ。食べ物を食べている間は他の神経回路を遮断し、味覚に集中させてじっくり味わうことができる。……おお、想像しただけで食欲がでてきた！ ちよつと食べてくる！」

「もう、自分勝手なんだから！ ……つつ込む気も失せたわ」

「いやあ、ゴメン待たせた」

男はじっくりと味わってケーキを食べて戻ってくると、少女はまだ先ほどの場所で立っていた。

「……………」

「ひよつとして怒ってる？」

まあ、無理もない。泥棒を捕まるため探しにきたというのに、開始早々こんなことをしては怒られても仕方ない。……しかし、妙だ。何か違和感を感じる。

「なんかお前雰囲気変わったな」

と言っても最後に見たときから何日も経っているわけではない。せいぜい1、2時間だ。待たされすぎて老けてしまったのだろうか……？ いや、そういうわけでもなさそうだ。

俺の全神経を視覚に集中させてよく観察してみる。服装はいつも

と同じ赤魔道士の衣装。ちなみに女性の衣装は男性用と違いスカート状のものが主流だ。彼女もそれを着用していて、必ずニーソックスを履いていた。スカートとニーソックスの狭間から少しだけ露出している肌は“絶対領域”と呼ばれ、少なからず男性の間で人気を博していた。俺も毎日それを拝見しているわけだが、どうも彼女の“絶対領域”を見てもぐつとくるものがない。どうしてなんだろうな。と、ここでその“絶対領域”に黒いヒョロヒョロとしたものが肌から伸びているのに気付く。……毛!?

「お前……誰だ？」

それまで黙り込んでいた少女がニヤリと笑い、

「フン、ばれたか」

男のような太い声で言った。そして一瞬で変装を解き、正体をあらわす。

「盗賊^{シーフ}か。変装にはお粗末だな。仮装でもしていたのか？」

動きやすそうな身軽な服装をした小柄な悪人面の男が姿を見せた。

「この不景気なご時世にカップルで旅をするとはめでたい奴め」

「なんかお前勘違いしてるぞ」

「きつとさぞかしたくさんの金を持っているに違いない」

ヒツヒツヒ。といかにもな悪者風の笑い声とともに卑しい顔でこちらを見る。

「悪いけどちつとも持っていないんだが……」

「嘘をつくな！俺が変装していたこの女の身柄は預かっている。

おとなしく金を渡しにこなければ酷い目にあわせるからな」

「本当に持ってないんだけど……」

「うるさい！じゃあちゃんと俺は伝えたからな」

一方的にそう告げ終わると、その盗賊は軽快に建物の上まで駆け上り、屋根から屋根へとジャンプして飛び去っていく。

「参ったナア……」

男はその後ろ姿をぼんやりと見つめながら、どうしようかと思案していた。

もってこいだ」

そして、その盗賊は私の方を見るとニヤリと笑い、
「へへへ、なかなかの上玉ですな。取引が終わったらこの女好きに
していいんですかい？」

「ほう、お前そんなガキっぽい女が好みだったのか。……まあ勝手に
するといいさ。グワハハハハ！」

「ムググググ！（誰がガキっぽいですって！）」

「怒った顔もかわいいな。あとで可愛がってあげるぜ」

その男が私に歩み寄ってくる。気持ち悪いとかそういう前に恐怖
を感じた。

「おい、取引の前に何もするんじゃないぞ。……しかし、早く金
を用意して持ってこいつてんだ。ああ……待ちきれねえ……。金え

……金え……」

「来てやったぞ。ただし金は持ってきてないけどな」

「……どこだ？」

ヒゲ男は部屋を見渡す。確かに声はしたのだが、アイツはどこに
も見あたらない。

「隠れてねえで出てきやがれ！」

「まだ分からないのか。ここだ」

私も気が動転していて気がつくのが遅れたが、声は私の隣から発
せられていた。

その気持ち悪いと思っていた盗賊の男が変装を解き、姿を変貌さ
せる。

赤い衣装を身にまとったその男はまさしくあのムカツキ男だった。

「き、貴様……。俺の子分に化けていやがったのか……」

「やられたらやりかえす。これが俺のモットーだ」

「子供と一緒にじゃないの……」

やれやれ、と私が呆れると、続いてあいつも呆れた感じで、

「全く……。こんな雑魚軍団につかまるなよな。高貴なる赤魔道士
のイメージが崩れるじゃないか」

「悪かったわね、私が雑魚軍団以下の雑魚赤魔道士で」

「別にそこまでは言っていないだろ」

「……オイ、さっきから俺たちのことを雑魚、雑魚と馬鹿にしゃがって！ ぶつ殺されてえのか！」

「ぶつ殺されてえのは貴様等の方だ！ 女を人質なんかにとりやがつて。貴様等には牢獄か地獄がお似合いだ。どっちがいいか選ばせてやろう」

盗賊を圧倒する気迫で男は奴らを睨み付けていた。

「グハハ、威勢だけはいいがこちらは4人。そっちはお荷物のお嬢さんに貴様の2人。どうみても勝ち目はないと思うのだがな」

アイツは私に耳打ちして、

「俺はヒゲと雑魚2人。お前は1人。いけるか？」

「余裕よ。それより、あんたこそ無茶言ってるんじゃないの？」

「そんなことないさ。なんだって俺は一流の——」

「赤魔道士だからでしょ？」

「そつだ。いくぞ！」

結果は圧勝。そもそも盗賊は戦闘能力が高いわけではないので、あっさり勝利することができた。盗賊団の身柄はギルドへ引き渡し、今後の処遇が決定されていくこととなるだろう。

「こうしてこの町にしばらくの平和が訪れたのであった」

「なに綺麗にまとめようとしてるのよ。あーあ、この町では酷い目にあつてばかりで散々だわ……」

「今度はどんな町に行こうか？ やっぱり治安がいいところ？」

「どこでもいいけど……もうあんな助け方はやめてほしいわ。あんなだつて分かるまでホント怖かったんだから……」

「すぐに俺だと気付けないようじゃ、まだまだレベルが低いという証拠だな。ワーツハツハツハ」

「……………」

「……………どうした？」

「ねえ……、あのと私に言ったわよね。……その、……上玉とか……かわいいとか……。あれってやっぱりただの芝居で言っただけのセリフなの……？」

自分で言って頬が赤くなってるのが分かった。とても馬鹿っぽいことを言っている気がする。でも、聞いてみたい気がした。コイツが心の中で私のことをどんな風に思っているのか……。

「ん？ 何のこと？ ……あつ、おっちゃん、ラーメンっ！ あとで替え玉でおかわりするからよろしく！」

アイツは屋台のラーメン屋を発見し、においにつられすぐさま走っていく……。

「馬鹿、アホ、死ねーーーーっ！」

こうしてこの瞬間、私はとび蹴りを習得しましたとき。

8 話「赤魔道士の苦悩」(前書き)

閑話休題。

8話「赤魔道士の苦悩」

「はあ、やってらんないぜ」

ひげ面のおじさん風貌の赤魔道士は、ため息まじりに酒の入ったグラスをテーブルに置きながら言った。

「全くだぜ」

その対面に座っていたもう一人の細身で長身の赤魔道士も、一口酒をグイッと飲んでからグラスをテーブルに置いた。

「正直、昔は理想ばかりを追っかけてて、まるで現実のことなんて見てなかったな。赤魔道士になったのだって、なんでもできる完璧超人になれる唯一の職業だと思って選んだわけだが……。実際はどの分野においてもほかのジョブに劣るだけで、自分の無能さに辟易させられたよ。おとなしくひとつのことだけ極めておけば俺もこんなことで愚痴を言うことはなかったんだろうがな」

「全部において中途半端ですからね」

「そうだな」

「誰がこんな赤魔道士なんてもの考えたんでしょうかねえ」

「ほんとそうだな」

と言つてまた酒を口に運ぶ。すでにテーブルには空きのグラスが大量に置かれていて相当飲んでいる様子である。

細身の方の赤魔道士が、ふと何かを思い出し「そうそう」と言つて話し始める。

「そしてなによりムカツクのが、すべての分野においてほかの職業をも超える能力を持った赤魔道士がいるらしいってことです。しかもそいつはまだすごく若い」

「それはムカツク話だな」

「ですよ、ムカツきますよね」

「ああ、ム力つくぜ……。ああ、ホントに世の中ってやつあ……。ヒック」

「酔ってるんじゃないですか。大丈夫ですか？」

「ああん？ 大丈夫に決まってるだろ。オメエこそさっきから飲むペース落ちたんじゃねえのか？ まだまだこれからだぞ。分かってんのか？」

「大丈夫ですとも。どんどんいきましょうー！」

二人ともすでに顔は真っ赤だったがそれでも飲むことはやめようとしな

……ある日の昼の酒場の会話であった。

「仕事まわってこねーなー……」

「……ですね」

9話「小さな赤魔道士」

「いいか。俺はこれまでずっとお前に言ってきたことがある」

男は改まって言い直すため、このように前置きした。

「うん」

はいはいわかってますから。と顔に書いてあるかのごとく、うんざりといった感じの表情で少女は返事を返した。

「赤魔道士は他のどんな職業にも劣らないくらい強くなっちゃいけない。一匹狼として名を馳せるのだ。間違っても赤魔道士同士でパーティーを組んだりなんてしちゃいけないぞ。弱いもの同士が組んだところで所詮それはただの雑魚軍団にすぎないのだからな」

「でも私たちも赤魔道士同士で組んでるじゃない」

この旅路で幾度となくこの同じ話題を繰り返してきた。その旅に私とこいつとで意見は二つに割れ、これまでもそして今も不毛な会話をし続けていた。

私としては、前衛にも後衛にもなりえる赤魔道士というジョブとしての役割が、パーティーに柔軟な戦略を立てるのに有効なんじゃないかと思う。

「フハハハ！ 何を勘違いしている小娘よ。もともとお前は頭数としてカウントしてないのだ。俺一人で十分なところにおまけでお前がいるだけなのだ」

「はいはい」

わかってますよーだ。と心の中でつぶやく。お互いに頑固で絶対に自分の意見を貫こうとするから、この話題は早く切り上げてしまったほうがいい。

確かにアイツの意見は一理ある。といっても一匹狼で戦うなんてことができるのは相当な実力を有していないとできないことであってあまり現実的ではない。アイツ自身はその実力があるのでそんなことを言うのだ。でもまあつまり、アイツとしては私にもそのくら

いの実力をつけろという風に言っているということだ。

理想論的ではあるがそれを現実にしてしまった男が目の前にいる。そして私はコイツに出会ってから一人前の赤魔道士になるためにコイツと旅をしている。だったらまずはそのみち私自身が強くならなくちゃいけないことには変わりないだろう。

二人は森の中を歩いていった。

この先にある村で宿泊の予定である。

……にしても、

「なんだか修行してるんだか旅行してるんだかワケわからなくなってきたわ」

「何言ってるんだ。常に俺は修行しつつ旅行してるぞ。時に厳しく、時に楽しくだ！」

「アンタの場合は常に楽しく！でしょうが」

「ひどいこと言うなー、君は」

しばらく歩いていっていると、人が倒れていた。かなり背は低く、小人と言ってもいいかもしれない。

「赤装束……同業者か」

「……死んでるの？」

私はおそろおそろ彼に聞いてみた。彼は首の脈を測った後、首を横に振ってみせた。

確認しなくても周辺に血が流れていたのでまず間違いなかった。

でも、ちゃんと確かめるまで認めたくなかった。

「おいおい勘弁してくれよ。赤魔道士がこんなチンケなところでくたばってくれちゃ困るんだぜ」

彼はごく普通に、いつものように笑いながら言った。

「なんでアンタはこんな状況でも笑っていられるのよ！ 人が死んでるのよ！ こんなときまで楽しくいようだなんてどうかしてるわよっ！」

「まあ落ち着けアンポンタン」

「なんですって!？」

あと少しでもふざけたことを言おうものなら殴りかかってやろう
と思ったが、彼は懷から何かを取り出して私に見せる。

「これが何かわかるか」

「……？」

「とりあえず見とけ」

と言うと、彼はそれを小人に投げやる。するとたちまち小人の周
りに輝かしいほどの聖なる光が発生したかと思うと……その小人は
何事もなかったかのように復活した。

「フェニックスの尾だ。戦闘不能者を復活させるアイテムだよ。こ
んなことも知らないでよく旅を続けられたものだね」

私はその光景を目の当たりにしてばかーんとしていた。だってあ
りえるだろうか。さっきまでピクリとも動かなかったのに、それが
今ではピンピンしている。こんなことって……。

「……それってゲームとかマンガみた——」

「おおっとそれ以上は言うな。世界観が崩壊する」

「……そうね」

小人は立ち上がると周囲を見渡した。そして、私たちの存在に気
づく。

「ああ……ここでアイツにやられて……それで……」

「どうやら意識ははつきりしてるみたいだな」

「助けていただいたみたいですね。どうもありがとうございます。
では僕は急いでますのでこれで……」

と、お礼を済ませると慌てて走り出して、森の中へと消えていっ
てしまった。

「さっきまで死んでたくせに忙しい奴だ」

「あの子怪我も完治してないのにどこにいくつもりなのかしら……」
と言って考えて分かるものでもなかったので、とりあえず自分た
ちの目的地に向けて歩こうとしたら、前から走ってきた、（これま
た小さい）少女に声をかけられた。

「あのー……。この辺で私くらいの背格好の人を見かけませんか？ 赤魔道士の格好をしたと思うんですけど」

可愛らしいその少女は黒いローブに身をまとい、杖を持っていたので間違いなく黒魔道士だった。

「見たよ」

例によつて彼はごく普通に気軽な感じで答えた。一方でその少女は焦りを表情に浮かべ不安そうにしている。

「ホ、ホントですか？ 彼どっちに向かつてましたか？ ……死んでないといいけど」

「さつき死んでたよ」

「えっ！？」

目を丸く見開き驚く少女。

「死んでたから、フェニックスの尾で生き返らせたんだ。そしたら急いでると言つて、走つてどこかに行つてしまつたよ」

「アンタもつとオブラートに包んだ物言いができないの？」

「真実をはつきりいつてやらないと、物事がしっかり伝わらないだろ」

「……むっ」

ああいえばこういう……。

「あのバカ……。すみません旅の方。一緒にあいつを探してくれませんか？ 一刻も早く見つけないと……。訳は後で話します」

「俺ははやく村に着いて、宿でくつろぎ——イテテ」

私がアイツの耳を引きちぎる勢いで引つ張つてやると、彼は、

「ハイ、……探させてください」

10話「大きな愛の話」

「実は……」

3人とも走りながら、黒魔道士の少女の話を聞いた。

なんでも、その少年との間である取り決めのようなものを決めてしまったらしく、彼はそれにしたがって、この森に生息するモンスター、モルボルを倒そうとしているらしい。

「モルボルねえ……」

「まさか本当にやろうとしてしまうなんて……。あんなこと言っんじゃないかった……」

少女は声を震わせ、涙目になりながらそう言った。

「例の取り決めのこと？　なんて言っただのさ？」

「そ、それは……。……言えません!!」

今度は恥ずかしそうにして言った。

「……にしても、そのフェニックスの尾で何度でも生き返るのなら慌てて探さなくてもなんとかなる気がするんだけど……」

若干不謹慎な発言のような気がしなくもないが、あのアイテムさえあれば問題なしのようにも思える。

「実はアレ、感動的なイベントとか死亡フラグを立ててしまったときは復活させることができないんだよね」

「それってつまり……？」

「今回は復活させることができないパターンです!」

と彼はキツパリと言い放った。

「なんですって!？」

なんということだ。一刻もはやく探さないと大変なことになる。

……というか、前回に引き続きメタ発言が続くわね……。

「とにかく……。まとまって動いていても仕方ない、手分けして探そう。相手は強力だ、見つけたらすぐに俺を呼ぶこと!」

3人はそれぞれ別の方向に分かれて探し始めた。

「くそつ、今度こそは……」
小さな赤魔道士が走っていた。彼はタルタルという種族で、成人でも背丈は人間の子供くらいしかない。
といつても彼はまだ子供の分類に入る年齢には違いなかったのだ。

森の中を駆け巡る。まだ先ほどまでの痛みは残っているがまだ動けそうだった。

「どこにいるんだ……？」

周囲を見渡しながら進む。標的となるターゲットは見つからない。しかし、再び見つけたとして倒せるだろうか。敵はかなり手強い。でも、勝つしかない。

「俺、お、お前のことが好きだ……」

タルタルの少年は自分の想いを口にした。初めてきちんと相手に伝えたこの気持ち。しかし……、

「フフ、何言ってるのよ、バーカ。私たちがただの幼馴染でしょうが……軽く受け流されてしまった。」

「私、強い人が好きなの。……そうね、あなたがモルボルを倒せるくらいになったら考えてあげてもいいわよ」

「モルボル？ ああ、臭くて気持ち悪い、凶悪モンスターのことか？」

「そうよ。あのくらい倒せなきゃダメね」

「それ、本当か？」

「フフフ、本気で言ってるの？ やめときなさいって。モルボルは並大抵の人間じゃ太刀打ちできないんだから！ ……あと、あんたに言い忘れてたんだけど、私近いうちに旅に出ようと思ってるんだ。黒魔道士としてもつと実力をつけるためにね。あんたは私なんかよりももっといい人を見つけないよ？」

なんとしても彼女がいなくなってしまう前にモルボルを倒さなくては……. と思い、こうしてやってきたはいいが、既に1度敗北している。やはり、無理なのか…….

「きゃあああああああつ！」

静寂な森に悲鳴が響き渡る。この声の主を少年はよく知っていた…….

急いで声のした方へと向かう。近づくにつれ、この世のものとは思えない異臭が漂い始める。この感覚、間違いない……. 奴だ。

声の主のところまでたどり着くと、そこにはモルボルと、それから伸びている触手によって捕らえられた、黒魔道士の彼女の姿があった。

「おい、大丈夫か!？」

「く、く……」

「苦しいのか？」

「く、臭い……」

と言い終えると、気絶してしまったのか、返事をしなくなった。

絶対に助けなくては！ それと同時に足が震えだす。

一度敗北を味わった時の記憶が蘇る。……. また返り討ちに遭うのではないか。そう思うと、今にも逃げ出したくなる。

そしてなんといてもこのモルボルの存在感。並みの人間の身長を圧倒的に凌駕する体格。そして何本も伸びている触手。こいつほど不気味なモンスターもそうそういないだろう。

「ソイツを放せ！」

内心ビクビクしながらも、気付いたらそう発していた。やはり、心の中でこいつを倒せと叫んでいる。

手始めにファイアの詠唱を始める。その間、あいつは不気味な表情でこちらを見つめている。余裕を見せているつもりだろうか。まったく攻撃を仕掛けてこようしない。

「ファイア！」

詠唱を終え、火の弾がモルボルを目掛けて飛んでいく。命中した。……しかし、モルボルは動じない。

「くそ、やはり効いてない……」

今度はこっちの番だとばかりにモルボルがじりじりと少年の方へ迫り寄ってくる。

マズイ、このまま触手に捕らえられるとそのままお陀仏してしまう。

「もう一度、ファイアよ！」

「あ、あなたはさっきの……」

駆け寄ってきた少女は言った。彼女もまた赤魔道士らしく赤の衣装を身にまとっていた。

「ダメです！ これは俺の戦いなんです。だから手出ししないでください」

「なにかっこつけてんの！ 死んだら元も子もないでしょうが！ いいからさっさとファイアをやるの！ 二人同時でやればそれなりのダメージにはなるはずよ！」

「……。そうですね。やってみましょう！」

もはや躊躇している時間などない。二人はファイアの詠唱を始める。そして、同時に、

『ファイラ！』

火の弾が二つ合わさり、大きな弾となる。

モルボルに命中し、炸裂する！ それなりのダメージを与えたらしく、モルボルが身もたえする。すると、触手で締め付けていた力が弱まり、彼女が地面に放り投げられる。

「大丈夫か！」

少年がすぐさま駆け寄る。すると、

「ええ、なんとか。フフ、あんたに助けられるなんて意外だわ……」
弱々しい声で言う。

「まだ終わっちゃいない。……あいつを倒すまでは」

多分ここで逃げ出しても逃げ切れないだろう。ならば方法は一つ。倒すまでだ。

「いつの間にかあんたも男らしくなったのね」

「待ってる、すぐに終わらせてやるから」

と言うと、少年はモルボルに正対し、魔法の詠唱を始める。

「フフ、……私も魔道士よ。戦えるわ」

少女もゆっくりと立ち上がり、魔法の詠唱を始めた。

「行くわよ！」

「ああ！」

『ファイガー！』

二人の魔法が合わさり強力な炎がモルボルを焼き尽くす！ 間もなくしてモルボルは倒れた。

「バカバカ！ 本当に行くことないじゃない！ 心配したんだから」

少女は只をこねる子供のように言った。

「ハハ、でも見ただろ？ ちゃんと倒せたぜモルボル」

少年は自慢げに言った。誇らしげでもある。

「……ホントにバカなんだから。でもあれはアンタ一人の力じゃないんだからね。トドメだって私の黒魔法があつてこそその勝利だったんから！」

「何をっ！ 赤魔道士をなめるなよ！」

「だって、本当の事じゃない。あんた一人の力じゃどうにもならなかったわよ」

「く、くっそ……。じゃああの取り決めは……」

「もちろん無効ね」

「そんな」

少年はとても悔しそうである……。

そしてしばらくの沈黙。

「ね、ねえ。前に私旅に出るって話したじゃない？ よかったらあんたも一緒に来ない？ さっきの戦闘で分かったんだけど、やっぱ

り私達結構いいコンビなのかもしれないし……。……。どう？」

「……………」

男はしばらく考える素振りを見せるが、やがて、

「……しょーがねーなあ。お前一人じゃ危なっかしいし、付いていってやるよ」

「しょうがないって何よ！？ だいたいあんただって一度死んでたっていうじゃない。もっと慎重に行動できないのかしら！」

「……それをいうならお前だって——」

まだまだ話は長引いていた。

それを私は傍からただただ見ていた。そして、

「もう、どう見ても恋人同士です。本当にありが——ゲフンゲフン」
「なにやらハッピーエンドのようだな」

と、隣にアイツがやってきた。

「あーあ、ほんと疲れちゃったぜ。早いとこフカフカのベッドで眠りたいぜ」

ふわああとあくびをしながら言う。

「アンタ今回何もしないじゃないの」

「まあまあ、そういうときだってあるって。それじゃあ僕らは僕らでさっさと行動しよう。いつまでもここにいたら彼らに悪いしね」

「……そ、そうね」

良い感じな雰囲気の二人を置いて、二人はそそくさとその場を後にした。

「あれ、あの少女は？」

とタルタルの少年がふと気付いたようにして言う。

「ホントだ。いないわね……。もう一人の方もいなさそうね……。お礼を言いそびれてしまったわ」

と少女がしまったとばかりに後悔している。

「でも、よくあんなデカブツ倒せたもんだ。我ながらビックリしたよ」

「私もよ。というより、ファイア数回与えただけで倒れるような敵じゃないはずなんだけど……」

少女が首をかしげて思案する。そういえばあのモルボル相当体力が消耗していたような気がしなくもないんだが……。

「まあ、細かいことはいいいじゃないか。これから旅の支度をしなくちゃ、さあ行こうよ」

「そうね」

少年が手を差し伸べると、少女がそれに応じる。それから二人は手をつないで歩いていった。

11話「ファイア&ボム」

「見る、ボムだ」

ボムは表面が炎で燃え上がっているモンスターである。

「本来ならばブリザド系の魔法で倒すのがセオリーだが……ファイガ……！」

ドオオオオオオオン！

「敢えてファイア系の魔法で攻撃するとこの通り爆発する」

「ちょ、ちよつとっ！ いきなりやるからビックリしたじゃないの」

「ハッハッハ。なかなかの威力だろ。この性質を利用してゲームをしようと思う」

「……イヤよ。あんまりいい予感がしないもの」

「ルールは単純だ。俺とお前で交互にファイアでボムに攻撃を加え、最後に爆発させてしまった方の負けだ」

「聞いてないし」

相変わらずマイペースな男である。……仕方ない。

「しょうがないわね……一回だけよ」

「じゃあまずは俺から！ くらえ、ファイアアアア！」

男は火力を調節し、絶妙なファイアをボムにくらわせた。ボムは後少しくも攻撃を加えようものなら爆発しそうな、そんな雰囲気である。

「よおし、さあ次は君の番だ。まあ、降参という手もあるが」

「ず、ずるい……。初めからこんなの勝負にすらなっていない。どうみたってあと一回ファイアを食らわせたなら爆発するに決まってる。と、ここでボムが動き出す。あのムカツキ男に向かってだ。

「お、おい。こっちにくるんじゃない！」

と言われて止まるはずもなく、ボムと男の距離はどんどん縮まる。

……なるほど仲間を爆発させられたから、敵討ちということか。

「ファイア！」

ドオオオオオオオン！

男はボムの爆風に巻き込まれる前に、ファイアを唱えボムを攻撃した。やはりボムは爆発してしまった。

「ふふーん。順番無視の反則に加え、ボムを爆発……。完全にアンタの負けね。日頃の行いが悪いからそういうことになるのよっ」
「ちっ」

その後、私は珍しく男が悔しがっている表情を見た。

12話「赤魔道士の休息」

「私、いつになったら一人前の赤魔道士になれるのかしら」

大きな木に身を預けるようにして座っていた私は、はあ、とため息をひとつついた。

「焦る事はないよ。君はまだ若いんだしね」

「あんだだって若いくせに、もう一人前じゃないの」

「ハッハッハ、なんてったって、俺は特別だからな」

「ム力つくわね……」

私たち二人は、大きな木の木陰に入って休憩していた。今日は日差しが強くてなかなか歩くのがしんどい。疲れて座っている私に対し、コイツはまだまだ全然余裕といった感じで休もうともしない。

「こんなにしんどいんなら、チヨコボを使っただった……」

チヨコボに乗っていけば今日の道のりも難なく終えることができた。しかも断然早い。

「ナンセンスだな。赤魔道士たるもの、他の力は借りてはいけない。それが例えチヨコボだとしてもな」

「それって、ただの頑固者じゃない？」

「そうだ。それが赤魔道士としての美德でもある」

「うーん、そうなのかしら」

「そうなのだ」

コイツが断定形でキツパリと言い切るものだから、そういうものなのかと納得してしまう。そして、だいたいそれは合っているのだと、後になって気づかされる。

「もし君がまだパーティを組んで戦闘をしたいと考えているようなら、赤魔道士は目指さないほうがいい。赤魔道士がパーティ内でやれることなんて限られているし、そもそもこの赤魔道士というジョブは一人でもなんでもこなすというのが利点なのだからな」

「そうかもね」

「そうなのだ」

これまでコイツと旅をしてきて思ったことがある。コイツとは幾度となく戦闘を共にしてきたが、一度たりとも協力してモンスターを倒すということをしなかった。あくまで複数の敵に対し、分担して撃破するという形をとってきた。これはコイツと私の仲が悪いという訳じゃない。自然とそうなっていた。だから多分、赤魔道士にとって一匹狼で戦うというスタイルは、案外自然なことなのかもしれないかった。

「俺らは赤魔道士を選んだ瞬間から、他のジョブとは異なる道を歩んできていたんだ。そうは思わないかい？」

「……なんとなく」

「今はそれで十分さ。……さてと、そろそろ行こうか。まだ先は長いからね」

彼は軽快な足取りでさっさと自分ひとりだけ歩き出した。

「……ものすごく、だるい」

私もゆっくりと立ち上がって、渋々歩き始めた。

12話「赤魔道士の休息」(後書き)

不定期更新で細々と2ヶ月程連載させて頂きました。
突然ではありますが、今回のこの話で一旦完結とします。
この作品を読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3790w/>

赤魔どうしの旅 -Final Fantasy another story-

2011年10月29日21時17分発行